
Winter,Love

海棠 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Winter Love

【ZPDF】

Z6271Z

【作者名】

海棠 朔

【あらすじ】

どんな時にも別れはくる。

それが永遠のものなのか、一時的なものなのか…。

(前書き)

いつも、お久しぶりです。海棠朔です。
年の瀬も迫ってきて、また恋愛系の小説を書いてみることになりました。

このサイト覗いて感じるのは…皆さん、毎日更新とか凄いですね…。
僕もそのぐらい出来るところのですが…（汗）

久しぶりの休日。冬の休日。

最近仕事が忙しかったからなあー。彼女とも全く会つことが出来てない。

多分彼女は、機嫌を損ねているだろう。

電話、してみよつかな…？

プルルルル…

久しぶりに聞くような古い電話の呼び出し音が何回か鳴って、彼女が電話に出た。

「はい、もしもし。」

聞きたれた声。でも、僕はまだ喋らない。彼女が怒つてたらと思うと怖くて怖くて、非通知設定にしてかけていた。

「どちらさまですか？」

ちょっとだけ苛々したような声。僕はまだ喋らない…。ここで妥協したら…。多分彼女はもう一回言ってくれるだろう。と、確信していた。

「どちらさまですか！？」

今度はさつきより少し強めの口調で言った。多分ここから話を切り出したら彼女は分かってくれるだろう。

「あのさ…。」

「え！？ 憲吾なの？ え！？」

「え、えっと…。」

予想以上の反応に僕は面食らってしまった。話し始めよつと黙った瞬間に、彼女は矢継ぎ早に語りだした。

「なんで、電話、くれなかつたの？もう、憲吾、私のこと嫌いになつちやつたのかと思つてた…。ねえ、何でなの？」
彼女の声は子供のよつだつた。

まるで、母親につぶらな瞳で質問する子供のような口調だった。

「「「めん…仕事、忙じくて…。」

「私より、仕事のほうが大事なんだ…。そつか。」

何か、拙い展開になつてしまつたか？彼女の暗い声を聴いて途端に不安になる。

「なんんてね。でも、寂しかつたのは本当なんだからね。どう償つてくれるつもり？」

明るい声は、いつもの彼女だつた。

「デート、しない？今日と明日休みなんだ。一緒にさ、東京の街でも歩かないか？」

少々の沈黙があつてから、彼女は返事をした。

「12時、渋谷駅でいい？」

「ああ。それじゃ。」

僕が電話を切つとすると、彼女は慌てたよつて見えた。

「待つて！」

「ん？」

「私のこと、好き？」

「何で、そんなこと聞くんだよ？」

「今だけは…今だけは答えて欲しいの、絶対。一回だけでいいから…。」

「愛してる。」

そう言ってから、僕は顔を赤らめた。急いで受話器を降ろす。あ～あまりの恥ずかしさに、12時に渋谷駅に行くのをすっぽかしてしまいたい気分だ。

12時。渋谷駅。東京の人たちもコートにマフラーですっかり冬仕様だな…。今日は冬にしちゃそんなに寒いわけじゃないけど、そんな格好の人たちを見ると凄く寒くなつてくる。

「ごめん、遅れちゃつた…。」

彼女が少し遅れて到着した。久しぶりに見て、僕は微笑んだ。待ってくれてる人がいるって、こんなに暖かいものなんだって、そう彼女の顔が物語っているような気がしたから。

「いこつか?」

「うん。」

彼女は僕の腕に手を回した。

12時だったから、とりあえず昼食もかねて、近くのカフェに入つた。

「何、食べる?」

そう訊ねる僕。自分は何も頼みもせずに、彼女の横顔を眺めていた。

彼女が恥ずかしそうにこっちを見た。

「そんなに見つめないでよ…。」

自分が彼女をじっと見つめているのにふと気が付く。

「あ、ごめん…。」

デートは何もかも久しぶりだったから……買い物も、一緒に遊ぶのも。

デートのやり方をすっかり忘れてしまっていて。ただ、彼女だけを永遠に眺めていたいっていうそれだけの想いしかなかった。

その度に、彼女は僕の様子を窺つた。でも、彼女もそれで納得してくれたみたいで、僕はあまり気を遣わなくて良かつた。

夜、お別れのとき。

背中合わせになってしまったたら、それが最後な気がして、「もうちょっと、もうちょっと…」って先延ばしにしてしまう、僕。明日も休みだから、またデートしようね。って言ったのに…離れるのが辛くて…。

寒かった。東京の冬、しかも夜なんてとてもなく寒い。

でも、僕等が座ってるベンチだけは違う。この空間だけは暖かい。そこは誰にも、僕らにしか入れない空間だから。だから、離れたくなかつた。

でも、別れは必ずやつてくる。

それは、永遠の別れかもしれない。

でも、僕等は違う。今日のデートの終わりの別れ。少なくとも、僕はそう願つている。恐らく彼女も。

僕等が歩き出した、その時、互いの頬を冷たい雪が撫でた。

(後書き)

いやー、ブランクって怖いー。このぐらいの短編書くのも結構難しかつたです。

最近恋愛系しか書けないのは何でなんだろう…。

今度は年明けぐらいにまた書けたらいいですね。
この場をお借りして、連載小説の件ももう暫くお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6271z/>

Winter,Love

2011年12月20日23時47分発行